教室ディベートフォーラム2005in札幌

北海道支部長・佐々木智之

恒例のディベート合宿が、名古屋、岡山、新潟に引き続き、今年度は札幌で開催された。運営する支部としては、いろいろな層の参加者がいることを想定し、「社会で生かす実践力を身につける」と副題を銘打った。

●11月19日（土）13：30～18：00

北海道での開催にふさわしく、当日の天気は雪であった。開会式に引き続き４つの講演と１つの実践報告がなされた。

□講演１

「いま教室ディベートに何ができるか」

講師：二杉孝司連盟理事長

内田樹氏の著書にあるディベート批判を導入に用い、パブリックスピーキング、学習のモデル、議論整理、実技、を視点にディベートの教育的価値を論じ、最後に「学力低下」に対して、ディベートがリサーチと議論構築によって学習の発展と深化を促すはたらきを有しているというまとめがなされた。

□講演２

「ディベートを活かしたライティング指導」

講師：太田昌宏連盟常任理事

太田氏が日常実践されている論理的な文章の書き方を、参加者が２つの演習を通して体験した。その中で紹介された「書き込み回覧作文」という手法は、いろいろな場面で応用が可能な活動事例であった。

□講演３

「ディベートの視点を取入れた英語の授業」

講師：佐々木智之北海道支部長

「自分の授業で、はたして学習者は英語を使っただろうか」という自己反省に基づき、ディベートを英語授業に取り入れたことによって、英語の授業が、学習者がどのように変わるのか、指導者と学習者の両者にとってどのような意味をもつかを説明した。

□講演４

「ディベート講座・リサーチの方法」

講師：岡山洋一北海道副支部長

トライアングルでも連載されているリサーチのコツをより具体的に説明された。30分の講演の中に「お金、時間、人、頭をどう使うか」「質は量の中から生まれる」「入手した資料の検証を必ず行う」「人は何かを批判しているものを無批判で受け入れる傾向がある」といった印象深い言葉が多々あった。

□　レポート

「５時間でできるディベート大会」

発表者：石山昌周　北嶺中・高等学校教諭

石山氏が中学校新フォーマットを用いて行った国語授業の実践が報告された。「新フォーマットは50分という授業時間内で本格的なディベートの楽しさを実感でき、ディベートの意義を学び取らせる最適な形式である。」という主張が、実際の指導の流れ、授業後の学習振り返りコメントによって強い説得力を伴って伝わってきた。

ここまでのプログラムは、講師対参加者というスタイルで進行してきたが、このフォーラムではインプットとしての傾聴に加えて、アウトプットとしての体験的活動も取り入れた。それが「体験ディベート」である。

□体験ディベート（準備編）

このプログラムは北海道支部が独自に行っているディベートアゴラを体験していただくものである。実際の試合は２日目で、１日目はチーム編成と資料配付を行った。論題は「日本はサマータイム制を導入すべきである」とした。チーム編成は、受付の際に行っ

たアンケートをもとにディベート暦を考慮した。ペアの組み合わせ、論題の説明を北大ディベート部の田巻さんと金山さんが担当した。

●11月20日（日）
□体験ディベート試合編
5つのグループに、肯定否定それぞれ２名１チームと１名のジャッジ。計25人が同時進行で試合を行った。立論と資料は用意してある。それを使って試合を展開していく「アゴラ方式」である。
□講演
演題：多文化共生時代の交渉力・ミディエーション
講師：御手洗昭治氏（札幌大学教授）
21世紀において日本人はどのようなネゴシエーション力を必要としているのかというポイントに沿って、豊富な歴史的背景の資料を基に論じられた。（この講演については別項で報告されるのでそちらをご参照ください。）
□講演
演題：これからの社会的コンセンサス作りに必要なディベート
講師：冨田房男氏（北海道バイオ産業振興協会会長）
富田氏は体験ディベートから参観され、中高生がディベートという議論の手法を会得することが、現代社会においていかに重要なことかを力説された。社会においてさまざまな専門分野の人間が議論をする際に、どのような力が求められるのか。社会形成に必要な人材を輩出するために何が必要なのかを論じた。
12時50からの閉会式を最後に、２日間に渡る情報満載のディベートフォーラムは幕を閉じた。参加者は１日目が53人、２日目が59人（両日ともスタッフを含む）である。全体のプログラムはここまでに報告した内容であるが、実はもう一つプログラムが存在していた。
●オプションプログラム
開会式に先立ち、１日目の午前中に入門講座という枠組みで３つの講座を行った。岡山副支部長による「ねこにもできるディベート入門講座」、古西事務局長による「ディベート入門講座－小学校編－」、そして私が担当した「英語ディベート入門講座」である。まさに三者三様の入門講座だった。これら3つの講座が３つの部屋でそれぞれ同時開催された。後日談だが、講師を担当した３人にとって残念だったのは、同時開催にしたために他の講座を参観できなかったことである。
古西氏の講座は、トライアングル11月号で「小学校への入門講座」として実施前の心境が掲載されていた。小学校での実践をふまえて「小学校に自動販売機を設置するべきである」という論題を用いて模擬授業などが行われた。
読者のみなさんはすでにご存知のとおり、岡山氏はいままでに多くのディベートテキストを執筆している。その中でも特に入門書として評判の高い「ねこでもできる～」を用いた講座だった。
そして私は、かつて自分が中学校教員の頃に撮影した英語ディベートのビデオを用いた。中学生が英語でディベートをしている試合の模様を視聴し、続いて参加者に英語の立論を提供して試合をしていただいた。論題は「都会に住む方が田舎に住むよりも幸せである」とした。
開会式前のプログラムから参加されるだけあって、どの講座も参加者の意欲が高かった。講師一同やりがいがあった。運営側としては、開会式はウォームアップではなく、その前から十分ヒートアップしていたのである。
また、１日目の日程終了後に行われた懇親会も重要なプログラムだったと言える。特に、北海道支部のスタッフが他の支部の方々と直接会って交流するという意味は大きかった。メーリングリストやホームページは支部間の距離によるギャップを埋めてくれる。ツールとしての利便性を日々実感している。それに加えて、今回は直接顔を合わせ、対話するコミュニケーションの大切さを実感した。この行事がいろいろな地区で開催されることの意味は大きいと言える。
●北海道開催を終えて
今回のディベートフォーラムを北海道で開催したことにより、自分が北海道支部にいること、この行事の意味などを考えるいい機会になった。

□　平成11年のこと

私がはじめてこの行事に参加したのは平成11年であった。その当時は「ディベート指導者合宿」という名称で、指導者のための研修だったのである。参加者にはディベートに関するレポート提出が義務づけられていた。１日目は講演やワークショップを行い、２日目は提出されたレポートの種類によってグループ活動をした。あの年は私にとって実際に生徒を引率してディベート甲子園に参加した最初の年だった。夏の幕張で鼓舞された気持ちがディベートを学ぶ推進力になっていた。一中学校教員として参加した自分にとって、指導者合宿は、自分がこれからどうやって生徒を指導していくかを考え、種々の情報を得る絶好の機会だったのである。

□全員参加のフォーラム

今回、北海道での開催にあたり、支部のスタッフで考えたのは、どのような参加者にどのような内容のプログラムを組むべきか、ということであった。参加者は、中高生、大学生、指導者、社会人と多岐に及ぶだろう。多様な参加者に対して、もはや「指導者合宿」という限定は不可能である。そして、北海道支部が常々目標としている「ディベートの普及」に根ざした行事にすることを考え、フォーラムという形態をとった。どんな立場の人も社会という大きな枠組みの中で生きている。ディベートを学ぶことが、単にディベート甲子園に出場するためだけではなく、社会生活を営む上で生きてはたらく力になる。そのようなねらいを重視して今回のフォーラムを構成した。

□北海道らしさ（プログラム編成）

今回のプログラムには、講演のような特別企画に加えて、北海道支部が日常行っている活動を取り入れた。その一つが体験ディベートである。これは毎月第２土曜日に行っている、ディベートアゴラの方式を用いた。当日会場に集まった人が、用意された論題と立論を用いてディベートの試合をする。一人で来ても、同じ学校の仲間と来てもディベートができるのである。この活動の始まりは、平成14年の初冬だった。当時、ディベート甲子園が終わった後、多くの学校は試合の場を失った。せっかく高まった意欲や習得した技能がしぼんでいく。もったいない。そこで、岡山副支部長の発案で始動したのが、このディベートアゴラである。中高生がチームとして参加するのはもちろんだが、進学先の学校にディベート部がないフリーのディベーター、授業にディベートを取り入れようと考えている教員、会社員、保護者、本州でディベート甲子園を経験し、現在北海道の大学にいる学生などさまざまな人が参加している。

このディベートアゴラがきっかけとなり、種々の大会が開催されるようになった。論題発表後の春の大会、地区予選前の練習試合会、秋の北嶺杯、そして冬の大会D-1グランプリと春夏秋冬つねに大会がある。そして、地区予選前の練習試合会を除いて、参加資格に学校という枠組みを必要としていない。誰とでもチームが組める。「開かれた場」を設けて１回でも多くディベートを経験できるようにしている。

□北海道支部らしさ（人のつながり）

今回のフォーラムには、もう一つの特徴があった。それはマンパワー（人の力）である。支部としての人員数は多くない。しかし人材は豊富である。何か行事を運営するとき、常に全員参加で、しかも個々が複数の仕事をかけもちしている。中でも北海道支部の活動を支えている大きな存在が北海道大学ディベート部である。甲子園OBの田巻さん、津田さんがいる。大会のジャッジ、甲子園参校へのコーチングといった技能面で活躍するばかりでなく、支部活動の企画立案にも参画している。今回は金山さんのアイデアでフォーラム用と支部PR用のポスターを作った（HP参照）。とにかく、みんなよく動く。

□未来へ

12月20日に「ディベート研究会」を発足した。北大の津田さんが「ディベート研究のフレームワーク」を、札幌市立北野台中学校の清水先生が「授業案・校内試合案」を提示し、参加者一同、ディベートへの意欲を新たにした。2005年にフォーラム開催によって高まった機運により、一人ひとりがますます熱くなっている。2006年も、衰えることなく動き続ける北海道支部である。